

# 『ジェイコブの部屋』の闇と光

太田素子

*Jacob's Room* (1922) は、Virginia Woolf の三番目の小説であり、彼女が伝統的小説の手法から脱皮して書いたはじめての小説である。*Jacob's Room* の書かれる三年前に彼女の代表的評論の一つである“Modern Fiction” (1919) が書かれているが、これは19世紀風リアリズムとは一線を画する新しい手法の実験小説宣言として、20世紀の小説を論ずる際にはよく引き合いに出される評論である。*Jacob's Room* は、この新しい理論の具体化として書かれた、作者はじめての大胆な実験小説であると言われている。伝統的小説の視点からは断片的でとらえにくいこの小説をとく鍵を求めるに当たり、この小説が元来、印象派的手法で描かれた、きわめて視覚的な小説といわれていることを思いおこしたい。<sup>(1)</sup> ストーリー展開や人物描写よりは、視覚的効果が読者にインパクトを与えている。光と色彩描写にすぐれていると言われるこの作品ではあるが、本論では、特に黒と闇の特有の視覚効果に着目し、灯や光と対比することで、*Jacob's Room* という作品を考察していきたい。

闇と光、夜と昼の問題は、すでに *Jacob's Room* の前作にあたる *Night and Day* (1919) の表題となっている。この夜と昼は「昼は交際、夜は瞑想<sup>(2)</sup>」「思考、孤独、夜の自由な独立した世界と、行動、社会、昼の拘束された世界<sup>(3)</sup>」という意味で用いられ、又、作者の永遠の主題である夢と現実のヴァリエーションをなす語でもある。本論で考察していく黒と闇も、苛酷な現実<sup>(4)</sup>を露呈させる昼の光との関わりが不可欠となる。

まず、黒の原点として、幼い Jacob を意識下の安息の中へすっぽりと包みこむ闇を考えていく。夜も更け家の灯が全て消された、ハリケーンの吹き荒れる夜の闇は以下の様に語られている。

There was a click in the front sitting-room. Mr. Pearce had extinguished the lamp. The garden went out. It was but a dark patch. Every inch was rained upon. Every blade of grass was bent by rain. Eyelids would have been fastened down by the rain. Lying on one's back one would have seen nothing

but muddle and confusion—clouds turning and turning, and something yellow-tinted and sulphurous in the darkness. (p. 12.)

嵐をはらんで攻撃的なこの夜の闇は Jacob を脅かしてはいない。夜の闇にすっぽり包まれた Jacob が意識下の眠りの中に深くやすらいでいる様子が“Jacob lay asleep, fast asleep, profoundly unconscious.” (p. 12.) と描かれる。黒と闇が幼児に与えるこのやすらぎを Jacob は以後、肉体的本能的には黒や闇に包まれた母と恋人に求め、精神的には闇のギリシャに求めていくことになる。

黒が強い視覚効果を与える最初の場面は、Jacob の幼児体験として次の様に描かれている。

The large red faces lying on the bandanna handkerchiefs stared up at Jacob. Jacob stared down at them. Holding his bucket very carefully, Jacob then jumped deliberately and trotted away very nonchalantly at first, but faster and faster as the waves came creaming up to him and he had to swerve to avoid them, and the gulls rose in front of him and floated out and settled again a little farther on. A large black woman was sitting on the sand. He ran towards her.

“Nanny! Nanny!” he cried, sobbing the words out on the crest of each gasping breath.

The waves came round her. She was a rock. She was covered with the seaweed which pops when it is pressed. He was lost.

There he stood. (p. 8.)

これは小説の冒頭近くの一場面である。幼い Jacob Flanders は母や兄と離れて砂浜で蟹をとっている。恋人同士が海岸に並んで横たわっているのに出くわし、じろりと睨みつけられて恐ろしくなって逃げだす。前方に彼の乳母の黒い姿 (black woman) を見つけて、安堵のあまりすすり泣きながら駆けよってみると、大きな岩と見間違えていたことがわかる。やすらぎの黒に包み込まれることを求めながら昼の光線で現実が露呈する構図が、安堵から落胆への彼の心の落差が、“She was a rock.” という簡潔な文章に見事に凝縮されている。“black woman” をめがけて走りだす時、男女の赤ら顔や派手な大判ハンカチの色彩の世界から、モノトーンの世界へと変わる視覚効果も鮮やかである。

乳母は彼の母 Betty Flanders の代わりとして求められている。“black woman” は未亡人 Mrs. Flanders の「黒い日傘」(p. 7.) と重なり合う。それ故、この“black woman” は不安と恐怖に駆られた幼児がやすらぎの対象として本能的に求める母親の視覚化とい

える。Jacobは三人兄弟の中でも母親から最も無関心に扱われている<sup>(5)</sup>。その上、本来Mrs. Flandersは決して母性的には描かれていない<sup>(6)</sup>。彼女は母子の関係よりも男女の関係が以合うように描かれて、それ故、JacobにとってMrs. Flandersは、浜辺で出くわし自分を睨みつけ脅かす恋人の男女と重なり合う部分をもつ。浜辺の男女が自分に対して放射する攻撃的で激しい感情から逃れようとしたJacobは、母の代わりに、母親的に一方的に包み込んで安らぎを与えてくれる対象として乳母(black woman)を求めて駆け寄ったのであった。そして、彼が乳母を求めるのはこの場面一度きりである。睨みつける男女の目を逃れ母性の安らぎを示す黒に包まれることを本能的に求めて走り寄ったJacobに、昼の明るい光線は、それが乳母ではなく岩であるという彼にとっては苛酷な現実を曝け出す。脅威の解消されない不安な現実の中に在るということを、彼は“*There he stood.*”と明確に認識させられるのである。闇にすっぽり包まれて安らぎ深く眠れる幼児の幸福な世界から、Jacobは自分に対して攻撃的で安らげることのない苛酷な大人の日常世界の現実に一瞬直面したのである。その直後にJacobは、苛酷な現実の象徴であるskullを拾い上げることになる。苛酷な現実の攻撃的な輪郭を包みこみぼやけさせることで人を安らげる黒と闇、そして、その黒と闇を照らし出して苛酷な現実を白日の下に曝け出す白昼の光線という構図が、見事な視覚効果によって定着されている場面である。

黒を効果的に用いたこの挿話でJacobが求めた黒は母親であった。しかし、決して母性的ではなかった母にも充たされず、又、母の代わりに一度だけ求めた乳母も見出せなかったJacobは、青年になると今度は恋人に黒を求めていくことになる。そして、Jacobが性関係を結ぶ娼婦Florindaにも黒が効果的に用いられている。青年となったJacobの前に、精神のみで肉体をもたない女であるClara Durrantと、肉体のみで精神をもたない女Florindaが登場する。しかし真昼の白い光がよく似合い夜もパーティの明るい灯の下で輝くClaraに好意を寄せられながら、JacobはClaraに安らげない。JacobにとってClaraは不毛でよそよそしい昼の世界に属する女性であった。これに対してJacobは、本能的にFlorindaの肉体に安らぎを求めて魅かれており、そして黒と共に描かれるのはClaraではなくてFlorindaなのである。

Florindaがはじめて登場する場面には、闇の黒が効果的に用いられている。

The flames had fairly caught.

“There’s St.Paul’s!” some one cried.

As the wood caught the city of London was lit up for a second ; on other sides of the fire there were trees. Of the faces which came out fresh and vivid as though painted in yellow and red, the most prominent was a girl’s face. By a trick of the firelight she seemed to have no body. The oval of the face and hair

hung beside the fire with a dark vacuum for background. (pp. 72-3)

Guy Fawkes Day の夜、焚火を囲む人々の中で一際目立つ女性の顔が Florinda である。頭部のみに明かりが当たり、首から下はまるで“have no body” のようだと語られて、光と闇の対比による強烈な視覚効果をあげている。Florinda の肉体の輪郭をすっぽりと包み込んで“dark vacuum” に変える闇に、そして厳しい現実を闇の中に溶かしこんでしまったような Florinda の肉体に、自らも包み込まれたいと Jacob は、Florinda を求めていくのである。

黒と闇に包み込まれたい Jacob の願望は、さらに、レストランで見かけた“black woman” と重ね合せて語られる。二人の食事中に、一人の女が連れの男に罵声を浴びせて、男を残したままさっと出ていく。これが black woman である。彼女が闇に消える場面から、その闇の中を Jacob と Florinda が彼の部屋へ辿りつくまでは以下の様に重ね合わせて語られる。

Out she swept, the black woman with the dancing feather in her hat.

Yet she had to go somewhere. The night is not tumultuous black ocean in which you sink or sail as a star. As a matter of fact it was a wet November night. The lamps of Soho made large greasy spots of light upon the pavement. The by-streets were dark enough to shelter man or woman leaning against the doorways ……

Where had the other woman got to? And the man?

The street lamps do not carry far enough to tell us. The voices, angry, lustful, despairing, passionate, were scarcely more than the voices of caged beasts at night …… At once the pavement narrows, the chasm deepens. There! They've melted into it—both man and woman …… And so on again into the dark, …… Jacob, with Florinda on his arm, reached his room.

(pp. 80-81)

この女の消えた闇は、男女の関係をすっぽりと包み込み、男女の大声の喧嘩や修羅場を、つまり現実の攻撃的で角ばった全ての輪郭を、溶かしこむ役割が与えられている。その闇の中を、“black woman” と重なり合うようにして今度は Jacob が Florinda を腕に抱いて自分の部屋へ戻っていく。次に二人が描写されるときには明らかに二人の肉体関係が暗示されている。それ故、black woman もロンドンの闇も、Guy Fawkes Day の闇に溶けた Florinda の肉体と重なり合って、Jacob の本能的、肉体的安らぎへの憧憬を描

きだしているのである。

しかし、black woman の後を追うように Florinda と共に自室に戻った Jacob がランプの灯をともし場面には既に、Florinda の肉体への憧憬の黒はその挫折の兆しが見られる。Florinda を求めて二人きりになりつつも、彼は現実の男女の性関係について “In spite of defending indecency, Jacob doubted whether he liked it in the raw” (p, 81.) と逡巡を禁じ得ない。かつて幼児期に浜辺で寝そべる恋人の男女の放射する敵意と攻撃性に怯えた彼は、Florinda の肉体に憧れつつ現実の肉体関係にたじろかざるを得ない。彼が Florinda の黒と闇に包まれた肉体に求めたのは、本質的に攻撃的な男女の性関係ではなくて、苛酷な現実の攻撃から彼を護り肉体的に包み込み安らがせてくれる母親的役割であったのである。

Florinda の闇に包まれた肉体に “romantic” に憧れつつ、現実の男女関係に逡巡せざるをえなかった Jacob に、苛酷な現実が曝け出されて、再度 Jacob は傷つかざるをえない。二人の関係がしばらく続いた後、Jacob は夜のロンドンの明るい街灯の光を浴びて、Florinda が他の男と腕を組んで歩み去るのを、嫉妬に駆られて眺めることになる。

The light from the arc lamp drenched him from head to toe. He stood for a minute motionless beneath it. Shadows chequered the street. Other figures, single and together, poured out, wavered across, and obliterated Florinda and the man.

The light drenched Jacob from head to toe. You could see the pattern on his trousers; the old thorns on his stick; his shoe laces; bare hands; and face.

(p. 93.)

街路にみちあふれる光が闇を照らし出し、Florinda の裏切りという苛酷な現実を暴きだす。先の、母親への本能的な求めの黒と同じ経過をたどって、Florinda の肉体への憧憬の黒も、昼を思わせる明るい光線にさらされていく。Jacob は Florinda が自分だけのものではないという苛酷な現実を直視せざるをえなくなる。Jacob's Room は Virginia Woolf の小説の中では最も男女の性的関係を描写する場面が多い。にもかかわらず、Woolf 自身、男女の性関係だけで人間の完全な “companionship” がつくられるわけではないと考えていたのは Bernard Blackstone も指摘するところである。<sup>(7)</sup> Jacob が女性に求めた肉体的安らぎの黒は、いずれも挫折せざるをえなかった。しかも、Jacob が女性に包み込まれ安らぎたいと求めた黒は、その挫折の構図によってかえって強烈な視覚的インパクトを読者に与えて、黒の存在証明をすることになるのである。

このようにして黒と闇は母の場合にも恋人の場合にも、そこに肉体的に包み込まれて

安らぎたいと憧憬されつつ苛酷な現実という白日の下に曝されて挫折していった。しかし同時に彼は現実に住み暮らしているロンドンとは時空共にはるけき対象として古代ギリシャを憧憬しており、この精神的憧憬の対象としてのギリシャも、闇や黒と密接に関係してくる。次にこの Jacob の精神的憧憬としての黒を考えていきたい。Guy Fawkes Day の夜明けと British Museum を訪れた夜の二つの場面を、ロンドンにあって憧れる闇のギリシャの例としてあげる。

Guy Fawkes Day のにぎやかな夜も更け、夜明けに Jacob は大学の友人 Timothy Durrant と共にロンドンの Haverstock Hill からおりてくる。先に述べた、闇と焚火の中で Florinda がはじめて登場したのと同じ Guy Fawkes Day の夜である。夜明けといっても、11月6日の朝4～5時とするされているので、ロンドンのこの時刻はまだ闇が支配しているはずである。この闇の中で Jacob と Timmy はひたすらギリシャに憧れ、二人はロンドンではなく闇の中のギリシャを歩いている気分を味わう。

Jacob knew no more Greek than served him to stumble through a play. Of ancient history he knew nothing. However, as he tramped into London it seemed to him that they were making the flagstones ring on the road to the Acropolis, and that if Socrates saw them coming he would bestir himself and say “my fine fellows,” for the whole sentiment of Athens was entirely after his heart ; free, venturesome, high-spirited. (p.75.)

Jacob はアテネの心情を「自由で冒険好きで意気盛んな心」(“free, venturesome, high-spirited”) と讃えている。それは「感受性がつよい」(“impressionable”) Jacob の「僕は今あるがままの僕で、そういう自分でありたいと思っている」(“I am what I am and intend to be it” p.34) という憧れの境地である。ケンブリッジの Plumer 教授の昼食会で感じた現実の “discomfort” とそれは対照的な世界である。“this love of Greek” (p. 75.) と自ら述べる Jacob は、はるかなる憧れを語る精神的高揚感に満ちている。そして、この闇の中で憧れるギリシャがあくまで Jacob の心情の中での romantic な憧れのギリシャであることは、Jacob 自身、それ程ギリシャ語に堪能でもなく古代史にも疎いという事実(p. 75.)からも明らかである。これについては、後述する現代のギリシャ、白昼のパルテノン神殿来訪のもつ意味のところまで今一度ふれていきたい。

ギリシャ古典と闇が重なりあう場面がもうひとつある。昼間に British Museum で借りてきたギリシャ古典(Plato: *Phaedrus*)を、その夜、Jacob が自室で読み耽る時、“the visions and heat of brain” (p. 108.)につきうごかされて、闇の中でギリシャ古典に我を忘れる Jacob は次のように描かれている。

The *Phaedrus* is very difficult. And so, when at length one reads straight ahead, falling into step, marching on, becoming (so it seems) momentarily part of this rolling, imperturbable energy, which has driven darkness before it since Plato walked the Acropolis, it is impossible to see to the fire.

The dialogue draws to its close. Plato's argument is done. Plato's argument is stowed away in Jacob's mind, and for five minutes Jacob's mind continues alone, onwards, into the darkness. (p. 109.)

Jacobの敬愛するプラトンが闇のアクロポリスを歩く image は先の Guy Fawkes Day の場面と同じである。読み終わった Jacob は “for five minutes Jacob's mind continues alone, onwards, into the darkness” (p.109.) と語られる。自室の闇の中で体験する「脳を持つ幻想と熱」それ自体が Jacob が romantic に求めている闇のギリシャの本質であることに、Jacob は未だ気付いていない。彼の求めているのは、ギリシャ文明の遺跡や古代史、ギリシャ語といった現実には存在するもの、つまり上記の「脳を持つ幻想と熱」を覆っている「頭蓋骨」 (“bone lies cool over the visions and heat of the brain” p.108.) の部分ではないということは、彼が現実にはギリシャを訪れてはじめて明らかになっていくのである。

現実には生活しているケンブリッジやロンドンにいて、どれほど闇のギリシャの幻想に安らいでも、それは又さめる夢にしかすぎないと、この時点では Jacob は感じている。上記の「脳を持つ幻想と熱」も、すぐ後に Jacob の部屋の引かれたカーテンの外で繰り広げられるロンドンの街の現実の展開によって、破られていくのである。その彼が思いがけずに遺産をもらって、ギリシャを訪れる機会をもつことになる。現実のギリシャ旅行は、Jacob の心情にある「闇」のギリシャの意味を明確にすることになる。ロンドンを離れて現実のギリシャを訪れた Jacob は、古代ギリシャと古典に寄せていた自分の幻想と現代のギリシャの間のギャップにまずは激しくたじろぐ。“Modern Greece” は Jacob を憂鬱にさせる。

In spite of its ramshackle condition modern Greece is highly advanced in the electric tramway system, so that while Jacob sat in the hotel sitting-room the trams clanked, chimed, rang, rang, rang imperiously to get the donkeys out of the way, and one old woman who refused to budge, beneath the windows. The whole of civilization was being condemned.

The waiter was quite indifferent to that too. Aristotle, a dirty man,

carnivorously interested in the body of the only guest now occupying the only arm-chair, came into the room ostentatiously, put something down, put something straight, and saw that Jacob was still there. (p. 137.)

Jacobは現実のギリシャの俗物性をまのあたりにして、自分のギリシャへの幻想に思い至る。<sup>(8)</sup>しかも「幻想という驚くべき才能」を持っていなかったら今よりもっと不幸だろうとJacobは思う。Jacobがロンドンやケンブリッジの現実能耐え、自室という避難所で安らげたのは、幻想の中での闇のギリシャとして、プラトンやアリストテレスの古典の世界を持っていたことに、この辺りからJacobは気付いていく。そして、Florindaと性関係を持つ直前に、逡巡したJacobがrefugeとして求めたのも“male society, cloistered rooms, and the works of the classics” (p. 81.)であった。今、俗っぽい日常性を露呈してPlumer教授の昼食会と同質の俗悪性をもつ現実のギリシャに限りなく憂鬱になりつつ、はるけきものに憧れる“romantic vein in him” (p.139.)をもつJacobは、“I shall go to Ahtens all the same’ he resolved, looking very set, with this hook dragging in his side.” (p. 146.)と目前のギリシャを見届ける決心をする。そんなJacobの目にはアテネの街は“Now it is suburban ; now immortal” (p. 147.)と現代のギリシャの俗悪さ以外の面を垣間見させてくれることになる。この街をimmortalな存在にしているのはアクロポリスの丘にあるパルテノン神殿の遺跡である。パルテノン神殿はその確かな存在感と共に次のように描かれている。

The extreme definiteness with which they stand, now a brilliant white, again yellow, and in some lights red, imposes ideas of durability, of the emergence through the earth of some spiritual energy elsewhere dissipated in elegant trifles. But this durability exists quite independently of our admiration. Although the beauty is sufficiently humane to weaken us, to stir the deep deposit of mud—memories, abandonments, regrets, sentimental devotions—the Parthenon is separate from all that ; and if you consider how it has stood out all night, for centuries, you begin to connect the blaze (at midday the glare is dazzling and the frieze almost invisible) with the idea that perhaps it is beauty alone that is immortal……The Parthenon is really astonishing in its silent composure ; which is so vigorous that, far from being decayed, the Parthenon appears, on the contrary, likely to outlast the entire world. (pp. 147-8)

Jacobの意識のフィルターを通したあこがれのギリシャは闇と共に語られたが、このパ

ルテノン神殿は白昼に聳えたっている。しかも俗っぽい現代のギリシャを描く昼の光線より一段と光の強い“brilliant white” (p. 147.) “blaze” (p. 148.) と描かれて、昼の光の中に一際抜きんでて特別の白光を放つように描かれている。さらに幻想ではないしに “There they are” とその存在感が語られる。このパルテノン神殿が、有無を言わずに伝えてくる (“implore”) のは “ideas of durability” であり “likely to outlast the entire world” “far from being decayed” である。パルテノン神殿は “spiritual energy” を帯びて “vigorous” であり、“beauty alone that is immortal” と語られる。N. C. Thakur も *Jacob's Room* のギリシャについて、“It becomes a symbol of beauty and immortality”<sup>(9)</sup> と言っている。このように、Jacob のみたパルテノン神殿は異様なまでの活力に満ちて美と永遠を誇示し、その存在感は他を圧倒する。しかしこのパルテノン神殿は、「我々の賛美とは無関係に」 (“independently”) 存在するがゆえに、自らの “romantic vein” に突き動かされて、はるけき安らぎの場として彼の憧れる闇のギリシャとは別の存在なのであった。パルテノン神殿の示す活力と永遠性を “There they are” と受け入れつつ、Jacob 自身は、それによって何ら安らぎも痛痒も感じないことで、自らの心情の中の「闇のギリシャ」を識別していくことになる。“Greece was over; the Parthenon in ruins; yet there he was.” (p. 149.) と Jacob は “romantic vein” を持った mortal な自分の存在を改めて確認することになる。そして、その様な自分の心と眼を通してみるギリシャとして、再び夜のギリシャが Jacob に示唆を与えてくれる。白昼に眩しく輝いて、mortal な人間の賛美とは無関係に美と永遠を誇示するパルテノン神殿を目のあたりにした後、Jacob は、もう一度、今度は暗くなってからパルテノン神殿を訪れる。ギリシャで知合った魅力的な女性 Mrs. Sandra Wentworth と一緒である。闇が幾度も強調される中で “There was the Acropolis” (p. 160.) と神殿の存在は確認されるが、昼間のような “vigorous” で活力にあふれた描写はない。描かれるのは immortal なパルテノン神殿と mortal な人間の関係である。

They [i. e. Jacob and Sandra] had vanished. There was the Acropolis; but had they reached it? The columns and the Temple remain; the emotion of the living breaks fresh on them year after year; and of that what remains?

As for reaching the Acropolis who shall say that we ever do it, or that when Jacob woke next morning he found anything hard and durable to keep for ever? Still, he went with them to Constantinople. (p. 160.)

「生きている者の感動はくる日もくる日もそれらの建物にあたってだけちる。そういうものの中で何が残るだろう」とするされた後で、“When Jacob woke next morning he

found anything hard and durable to keep for ever?”という反語的な問いかけがなされる。“the emotion of the living”のレベルが目される時、重要なのは、何が永遠に残るかではなくて、「求めては砕け散る生者」の求めの姿勢であり関わりの姿勢である。Jacobの場合それは彼を彼たらしめている“romantic vein”つまり挫折しても挫折しても求めていく心であり、それが、光による苛酷な現実の露呈の中であって尚、闇と黒を求めていく姿勢となっていくのである。Jacobは、闇と共に描かれる古代ギリシャに憧れ、白昼の現代ギリシャに失望し、自らの存在とは関わりなく永遠を誇示して輝くパルテノン神殿を目のあたりに見ることで、再び自らとの関わりを闇の中のギリシャに見出すのである。彼の求めるギリシャは、白昼に見た俗悪な現代のギリシャの喧騒でもなく、個人の憧憬とは無関係に美と永遠を vigorous に誇示する白く輝くパルテノン神殿でもなかった。それが、immortal なギリシャ精神そのものではなく、ギリシャ精神への mortal な彼自身の憧れ即ち彼の心の中の夜の闇のギリシャであることに、Jacobは、このギリシャ旅行で思い至ったといえよう。

生身の女性に求めた肉体的本能的憧れの黒は、光にさらされる事で苛酷な現実を露呈して、Jacobの憧れは挫折する。しかし、彼の精神的憧憬の対象である闇のギリシャは、光にさらされ、俗っぽい現代のギリシャや、個の賛美と無関係に美と永遠を誇示するパルテノン神殿を目のあたりに見た後も、尚、それらとは一線を画して彼の心の中に存在し得ることを確認したことが、彼のギリシャ旅行の意味といえる。そして現実のギリシャとはむしろ無関係の、この彼の心の中の、闇のギリシャとは、既述したように、現実<sup>10</sup>に束縛されない、自分があるがままの自分でいられる場であり、さらに、敬愛するアリストテレスやプラトンが親しく話し掛けてくれ、そこに companionship の生まれる場といえよう。それはまさに、Florindaの肉体にふれようとして男女関係の持つ本質的攻撃性にたじろいだ時、彼が切に戻りたいと願った“male society, cloistered rooms and the works of the classics” (p. 81.)と深く関わってくる。そして、このような男同士の交友、世をさけて引きこもる部屋、古典の文学作品の三つから連想されるのは、ケンブリッジの学寮の学生たちの集いである。夜の闇に灯る真球色の灯の中、友人 Simeon の部屋では Julian the Apostate が論じられつつ、特有の親密感(intimacy)が漂っている。

It was the intimacy, a sort of spiritual suppleness, when mind prints upon mind indelibly.

“Well, you seem to have studied the subject ,” said Jacob, rising and standing over Simeon’s chair. He balanced himself ; he swayed a little. He appeared extraordinarily happy, as if his pleasure would brim and spill down the sides if Simeon spoke.

Simeon said nothing. Jacob remained standing. But intimacy—the room was full of it, still, deep, like a pool. Without need of movement or speech it rose softly and washed over everything, mollifying, kindling, and coating the mind with the lustre of pearl, …… (p. 44.)

俗物的なあるいは教条主義的な学者が揶揄される一方で、ケンブリッジは「さかまく海上はるかに……灯のともされた都」「学問の灯をもやし灯台のように闇を照らす<sup>(11)</sup>」と描かれる。Jacobの求めたギリシャが、現実の俗悪なギリシャや人間に無関心に durability を誇示するパルテノン神殿ではなく Jacobの心情の“romantic vein”の中に存在したように、白昼の Plumer 教授の昼食会の俗悪さや術学的な学者の空疎な議論を超えて存在するのがこの学寮での集いである。彼のいる学寮の方庭は、幼時の Jacob を包んだ安らぎの闇と重なって、学生の部屋を包み込み、“a sort of fulness settled on the court”(p. 41.)と語られる。苛酷な現実を知らなかった幼児 Jacob と違い、青年 Jacob は真の闇に憩う事は出来ない。そのような Jacob に対して、ここでは、現実を露呈させる昼の光ではなく、闇の中の真珠色の輝き (the lustre of pearl) が特有の親密感を包み込んでいる。この親密感「精神が精神のうえにぬぐいがたい跡を残す場合にもつ親密さ」として、古典を語る場合等の知的刺激によって支えられており、緊張感をともなう (“There was a sense of concentration in the air” p. 41.)と語られる。この集いは、Virginia Woolf が中期円熟期の小説で見事に描きだしたパーティとは少し異なり、むしろ後に Bloomsbury Group へと発展していく Woolf 自身と友人たちの厳選された集いである Midnight Society に近い。孤独の癒しを身近の特定の人物に求めきれずに大勢の人々を集めるパーティの女祭司にならざるをえなかった後の作品の女主人公達と違って、Jacob は少数の選ばれた人々との間に companionship を見出し得た。これはいわゆるパーティよりもより幸福な集いであり、『ジェイコブの部屋』という表題は、この集いの催される空間として重要な意味をもっているといえよう。そしてこのような充実感 (fulness) 緊張感 (concentration) 親密感 (intimacy) に充たされて安らぎの闇に包まれた真珠色に輝く集いこそ、Jacob が心の中の闇のギリシャとして求めたものの実現であった。しかもこれは “simple young men … there is no need to think of them grown old” (p. 41) という若者たちにのみ実現可能であった。Jacob は、この小説の最後で若くして戦死する。この若すぎる死によって、Jacob は、Woolf の他の小説の主人公と違って特別に、clock time の脅威から永遠に免れ得た。それ故に Jacob は “romantic vein in him” の挫折を知らずに、clock time の介入してこない闇の中で真珠色に輝く理想の集いを、彼の憧れる闇のギリシャの実現を果たしたといえよう。Jacob's Room 以後の作品の主人公たちは、若さの栄光を永遠に過去のものとして、孤独を癒してくれる人間も持たずに、老いと死に引

きずり込まれつつあることを常に自覚せざるを得なかった。これに対して、惜しまれつつ逝った作者の兄 Thoby への鎮魂をこめて創造された Jacob は、その若すぎる死によって clock time の脅威を免れ得たのであり、それ故に Jacob は “romantic vein in him” の真の挫折を知らずに、clock time の介入してこない闇の中で真珠色の輝きをもつ理想の集いの中に、彼の憧れる闇のギリシャの実現を果たすことが出来たのである。

注

*Jacob's Room* の引用は、Hogarth Press の Uniform Edition による。

- (1) 吉田安雄『ヴァージニア・ウルフ論集——主題と文体』（荒竹出版 1977） p. 35～
- (2) 同上、p.143
- (3) 亀井規子『ヴィクトリア朝の小説』（研究社 1991） p. 219.
- (4) Virginia Woolf にとって「現実」とは、いわゆる自然主義やリアリズムの作家のいう現実、即ち社会の悪や矛盾、人間同士の愛憎の生々しい葛藤とは無縁の、そういった生々しさを作家の意識のフィルターで濾過した、エッセンスとしての彼女特有の現実である。
- (5) Mrs. Flanders は “She was unreasonably irritated by Jacob's clumsiness” (p. 70) といらだち、“tiresome” (p. 5) “handful” (p. 9) と Jacob をもてあましている。
- (6) 夫を亡くした女盛りの未亡人として隣人のゴシップ種となり、また実際に病弱な妻のいる Captain Barfoot の愛人として描写されている女性である。 *To the Lighthouse* の Mrs. Ramsay が、子供達からも滞在客からも夫からさえも、包み込み安らぎを与えてくれる母親的役割を求められ、又、その求めを充たしてやれる女性であるのとは対照的である。
- (7) Bernard Blackstone, *Virginia Woolf: A Commentary* (London: The Hogarth Press, 1972), pp. 63-64
- (8) No doubt we should be, on the whole, much worse off than we are without our astonishing gift for illusion. At the age of twelve or so, having given up dolls and broken our steam engines, France, but much more probably Italy, and India almost for a certainty, draws the superfluous imagination . . . . But it is the governesses who start the Greek myth. Look at that for a head (they say)—nose, you see, straight as a dart, curls, eyebrows—everything appropriate to manly beauty; while his legs and arms have lines on them which indicate a perfect degree of development—the Greeks caring for the body as much as for the face. And the Greeks could paint fruit so that birds pecked at it. First you read Xenophon; then Euripides. One day—that was an occasion, by God—what people have said appears to have sense in it; “the Greek spirit”; the Greek this, that, and the other; though it is absurd, by the way, to say that any Greek comes near Shakespeare. The point is, however, that we have been brought up in an illusion. (pp. 136-7)
- (9) N. C. Thakur, *The Symbolism of Virginia Woolf* (London: Oxford University Press, 1965) p. 49.
- (10) *Jacob's Room*, p.34
- (11) *Ibid.*, p. 40.